

優秀賞

おねえさん、ありがとう

福井県 神山小学校 二年 山腰惟斗

「おねえさん、ぬれなかったかなあ。」

ぼくは、夏休みの間、たまに思い出しては、顔もおぼえていないおねえさんのことを、考えてしまいます。

夏休みに入ってすぐのことです。あまりにあついで、川にすずみにいくことになりました。池田町の「かずらばし」と言うところで、夏になると、まい年かぞくでいくところですよ。

木のつるでできたスリルまんてんのはしをわたったあとで、いつものぼしよで、川あそびをしてすずみましました。夕方なので、ぼくたちがいられもいません。いつもより水があたたかく、いつのまにか、どんどんふかいところまですすんでしまいました。

ながれのはやいところまできた、そのときです。ぼくのはいていたサンダルがぬげて、ながれてしまいました。すぐにお母さんをよんだけれど、お母さんもお兄ちゃんたちも、どんどんながされていくサンダルをおいかけることができません。ぼくは、なんとかサンダルをとりもどそうとおいかけると、ながれのはやい水に足をとられてころんでしまいました。頭からずぶぬれです。

「あぶないからあきらめなさい。」

とお母さんに言われて、楽しかった水あそびが一気にかなしい気持ちになりました。

そのとき、だれもいないと思っていたぼくたちのそばを、早歩きで歩くおねえさんが目に入りました。ぼうしにサングラス、きれいなワンピースといった、川に来るようなかっこうではありません。ぼくたちのよこを通りすぎ、下りゆうの方へ歩いていきました。

つぎに見たとき、ずっと下りゆうの方で、なんとそのおねえさんが川へ入っていくではありませんか。よく見ると、ながれていったぼくのサンダルをひろってくれています。それをいっしょに見ていたお兄ちゃんが、はしっておねえさんのところまでいきました。ぼくからは、二人のすがたは見えません。しばらくすると、サンダルをもったお兄ちゃんもどってきました。おねえさんからサンダルをもらって、ぼくのかわりにおれいを言ってくれたそうです。

「まだ、近くにいるかもしれないから、大きな声でおれいを言ったら。」

とお母さんに言われたけれど、なんだかはずかしくて言えませんでした。それから、おねえさんに会うことはないままかえりました。

サンダルがもどってきてうれしいはずなのに、いろんな気持ちで心がモヤモヤしました。川に入るようなかっこうではなかったのに、ぼくのサンダルをひろってくれたおねえさん。ようふくはぬれてしまっただろうな。やさしくてゆう気のある人だな。ありがとうって言えばよかったな。ぼくが大人になったとき、知らない人にここまでできるかなあ。ぼくは、「かずらばし」に来るたびに考えるだろうな、と思いました。

「おねえさん、ありがとう。」